

中務哲郎さんの思い出

松本 仁助

中務さんの豊富な学識とすぐれた人間性については、京都大学の西洋古典文学に関係をもつ人は皆承知していることです。例えば、中村善也さん、岡道男さんが不治の病に罹り亡くなられた時に親身の世話をしたこと、松平先生が病気になるれた時度々北白川から比叡平まで見舞いにいった暖かい気持については、教室の皆さんは知っているでしょう。だからそういうことについては、ここでわたしは述べることをしません。またわたしは現在も中務さんに公私にわたってお世話になっていますので、そのことまで中務さんの思い出として記すのは、可笑しいことでしょう。だから、わたしがこの場を借りて述べさせてもらうのは、中務さんの人間性と学識について、わたしが個人的に経験し感銘を受けたことです。

藤村泰司さんはすでに故人となりましたが、かれは「エリニカ」という古典ギリシア語ラテン語の教室を大阪の北浜に開設し、京大の西洋古典文学の大学院生卒業生が、現在古典の教授をしている高橋宏幸さん始め多くの人が、この教壇にたち、西洋古典語の習得に強い意欲をもつ多くの人たちにギリシア語ラテン語を教えたのは、周知のことです。なかには大阪大学哲学教授の中岡成文さんも教えてもらっていました。

この藤村さんが松平先生の下で古典文学を学んでいた頃、京阪電車の沿線にある石清水八幡宮への古典教室の遠足がありました。この遠足に参加したわたしは、中務さんと二人がなぜか教室の列の一番最後を歩いていました。そのとき中務さんが、時々振り返っていましたが、突然立ち止まり、後へ引き返していきました。わたしが振り返って見ますと、後ろに藤村さんが小さな娘さんを背中に背負おうとしていましたが、なかなか上手く背負えないようでした。中務さんはそれを手伝おうとして、引き返していったのです。実は、藤村さんは少し前に奥さんを亡くして、小さい娘さんを一人だけにしておけず、遠足に連れてきたのです。その後、中務さんは、遠足の間中、藤村さんの側を離れませんでした。このような暖かく優しい中務さんの行為をわたしは生涯忘れられません。

中務さんの学識の広さと深さは、古典教室の誰もが疑わないでしょう。中務さんが大学院生の頃、岡さんが助教授をしていて、松平先生の研究室で研究会

がありましたが、研究会の後、岡さんが中務さんに民話のことについて聞いていました。中務さんはそのことに即座に返答していましたが、わたしはその博識に吃驚しました。その後 30 年以上になりましたが、わたしが大阪学院大学の教授として、この大学で西洋古典学会を開催することになりましたが、大阪学院大学の決まりとして、当大学における開催学会の会員の少なくとも一人は研究発表をしなければならない、ということがありました。大阪学院大学での西洋古典学会の会員はわたし一人でしたから、わたしが研究発表をすることになりました。

そこで、中務さんと高橋さんが、大阪学院大学の研究発表会場と控室、懇親会場などを視察に来ましたとき、わたしは中務さんにわたしの研究発表テーマとして「オデュッセイアにおけるペネロペイアの再婚問題」をわたしました。後で、中務さんから「民話から叙事詩へ—ペネロペイアの再婚問題に関連して—」というテーマにしてはどうかという提案を受けました。わたしはこの助言にしたがう旨を返答しますと、中務さんは、「夫が行方不明になった妻に起こる再婚問題」に関する古今東西の民話の本を何冊もわたしてくれました。わたしは、これらの本で発表論文を作成するのに非常に助けられました。おかげでこのときの研究発表は、『西洋古典学研究 XLV』(1997)に掲載されることになり、わたしはおおいに感謝しています。

中務さんは贈呈された論文、本は必ず丹念に読んで感想を書かれ、誤りがあれば親切に指摘されます。これは、日本の学者に限らず、外国の学者についてもされています。多分イギリス人の学者から贈呈された論文のギリシア語の文章の英語への翻訳が間違っているのを指摘してお礼の返事をだされたところ、そのイギリス人の学者から中務さんの訂正にたいするお礼の返事がきた、ということでした。

話はかわりますが、同志社大学のドイツ語教室に前川道介という教授がいました。わたしが同志社にいました関係でこの前川さんを知っていたのですが、この人はドイツ文学の翻訳と評論、紹介に優れていて名も売れていましたので、同志社ドイツ語の若い教員から慕われ、前川さんとういう人たちは前川シェウレと言われていました。すでに大阪大学に移っていたわたしは、なにかのきっかけで西洋古典文学研究室の助手をしていた中務さんを前川さんに紹介しました。それ以後古典文学のことについてわたしに尋ねていた前川さんは、西洋古典の問題については中務さんに聞くようになりました。そしてわたしは、今度は逆に前川さんのことを中務さんに聞くようになったのです。前川さんも、

上記のような中務さんの学識を見抜いたのでしょう。こういうことから、古典古代のギリシア悲劇の日本語による全訳を京大西洋古典文学研究室が中心となって訳し、それを『ギリシア悲劇全集』として出版することになった時、岡さんがわたしに、当時すでに京都産業大学の助教授をしていた中務さんをこの出版の編集助手をしてもらうことにしました、と言われたときも、当然のことだろう、と思いました。

その後、わたしは、岡さんから自分の後継者に中務さんを選んだことの報せを電話でうけました。岡さんは、中務さんが大学院生の時にすでに民話のことなどを尋ねていたほどですし、イギリス人古典学者の古典ギリシア語からの英語への翻訳を訂正されたことも、聞かれていたことでしょうから、いや、岡さん自身が、中務さんの古典語、古典文学、古代ギリシア、ローマ文化にたいする深い知識を認識されておられたから、誰も異を唱えない人事だろう、と思いました。しかし、なによりもこのような気持をわたしが抱いたのには、つぎのようなことがあったからです。

それは、松平先生が定年退官され、岡さんがその後継者になり、その岡さんが教授になります 2~3 年前頃の夏のことですが、わたしが松平先生のお宅に伺った折、先生が「岡君の後、その助教授の席には誰が就くのだろう。君はどう思う」とわたしに尋ねられました。わたしは「中務さんじゃないのですか。他に誰か候補者がいるのですか」と答えました。すると、先生も「そうだろうね」と言われました。

この先生の言葉を聞いたとき、わたしは、研究室の誰もがこのように思っているのだ、というふうに思ったのです。だが、わたしがこのように取り沙汰している間も、周囲の思いには全く無関心に、同級生や後輩の面倒を中務さんが見てきたことは、皆の知るところでしょう。例えばもう亡くなった下田さんや大月さんなど、その他いろいろな人が大なり小なり中務さんの世話になっているでしょう。

いや、わたしの長男が、岡さんの推薦で中務さんから英語の特訓を受けました。おかげで長男は大阪大学の学生時代からすでに彼の学んでいた研究室にアメリカからきた学者の通訳をしたりしていて、現在では、自分の企業を経営して諸外国との取引を英語でしています。これも先程言いました中務さんのお陰です。わたしも長男も深く感謝しています。

中務さんは、来年 3 月で定年退職しますが、その後継者には高橋宏幸さんとなり、さらにマルティン・チェスコさんがあらたに西洋古典文学教室に 10 月 1

日に赴任しました。だから中務さんも、心おきなく出版社から依頼される著作に励まれることができるでしょう。そうなるよう願って、思い出の記とさせていただきます。

2009年11月14日